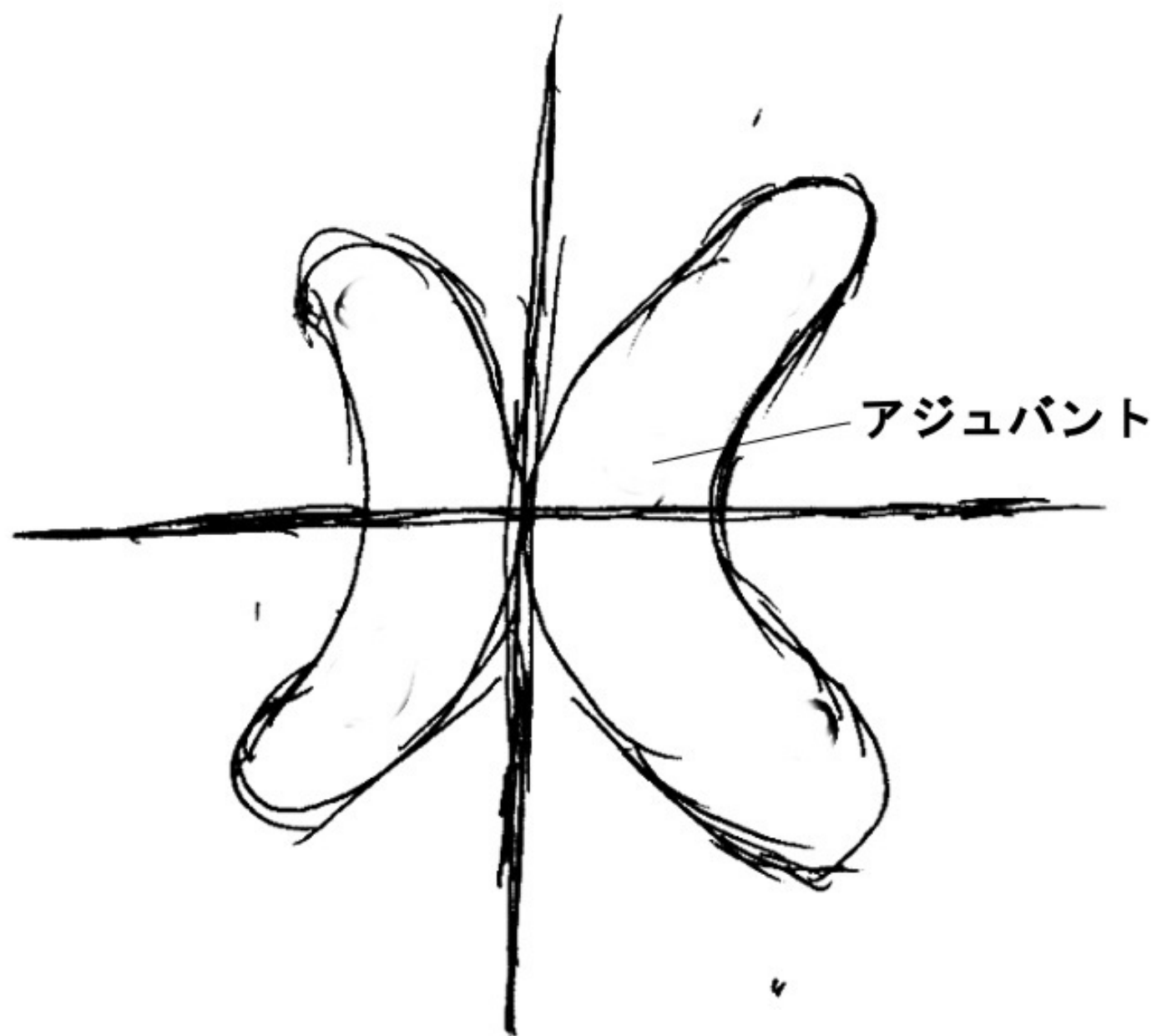


虚構のイントロ



東雲八夫

アジュバント

名称は、ワイルドガーデン。両の手から、少しはみ出すくらいの大きさが一般的で、時々、それよりも大きい個体が存在する。ほぼ、丸に近い体型だが、四足で歩行する。そして、白みがかかった黄色の毛で、全身が覆われている。

少年は、昨日の朝から風邪をひいて、寝込んでいた。珍しいことではない。元々病弱で、数年前には肝臓を患って死にかけたこともあったのだ。

来年、中学生になる。

一匹のワイルドガーデンが、枕元にいた。うずくまり、動かない。少年の肩のところに、顔を寄せている。

額には、うっすらと汗が滲んでいた。

少年が、目を覚ました。天井。その瞳で、真っ直ぐに見ている。手をついて起き上がり、壁に背中を預ける。

「お前、死ぬの、恐いか」

少年がそう聞くと、見上げながら、ワイルドガーデンは、ぐう、と鳴いた。

少年は、額の汗をパジャマの袖で拭った。コップの水に、手を伸ばす。喉を鳴らして、半分、飲んだ。

前髪が、大分長くなっていた。ちょうど、毛先が目に入る。

「俺は、怖い」

言いながら、ワイルドガーデンの頭を撫でた。そのワイルドガーデンは、脇腹の辺りが少し盛り上がっている。

「お前、なんなんだろうな」

すくうように、抱き上げた。

ワイルドガーデンは真っ黒な瞳で少年を見つめ、静かにそれを広げた。

翼である。

本来、ワイルドガーデンに翼などは生えない。少年はずいぶんと調べてきたが、やはりそのような個体はいないらしい。自分に原因があるのか。それとも、ワイルドガーデンに原因があるのか。わからない。

翼のことは、誰にも言っていない。

二年前、少年はワイルドガーデンを飼い始めた。その時は、片手に乗れるほどの大きさしかなく、翼も生えていなかった。

名前は、付けなかった。この二年間、少年は、おい、とか、お前とか、呼んできた。父や母は、ぐうとか、ぐうちゃんとか、呼んでいた。

ワイルドガーデンは、少年が学校から帰ってくると、いつも窓のところにいた。日に当たりながら、餌をかじっているのだった。そこまで持って行って食べているので、よく、床に餌のかけらが転がっていた。そして、部屋に入ってきた少年を見ると、ぐう、と鳴くのだった。いつのま

にか、少年はそれに対し、ただいま、と返すようになっていた。

ワイルドガーデンが家に来て、一ヶ月が経った頃、さらに少年は学校を休むようになった。時期的なもので、ワイルドガーデンとは関係がない。毎年のことなので、わかってはいたが、少年の両親は心配していた。

所謂、風邪である。少年は、まだ手術を受けていなかった。だから、風邪をひく。

手術は満五歳で受けられる。それ以下の年齢では、体が耐えられないと考えられている。内容は、ワイルドガーデンの細胞を人体へ移植する、単純なものだ。それぞれ、場所は骨髄である。

少年の血は、赤に近い、朱色をしている。手術を受けた人間の血は、黄色に近い橙色だ。

術後の色の変化は、ワイルドガーデン由来の万能血球によるものである。

万能血球は、状況により様々な振る舞いをする。なかでも注目すべきは、白血球種としての働きだ。外部から侵入してきた細菌類、ウイルスに対する攻撃反応が非常に強い。さらに万能血球は、骨髄へ移植した細胞に対し、そのウイルスの増殖経路を阻害する酵素を作るよう指令を出すこともできる。

人間がこの万能血球を取り込むためには、手術以前に、約一年、ワイルドガーデンと生活を共にする必要がある。その間に、ワイルドガーデンは移植後に拒絶反応が起きないように、変化する。そもそも、拒絶反応は起きないように設計されているが、安全のため、猶予期間が設けられているのだ。

ワイルドガーデンは、移植する人間の細胞を元に作られている。だから、通常、拒絶反応は起きない。

だが、少年は違った。ワイルドガーデンに拒絶反応を起こす人間は、数十年いなかったため、医者も研究者も驚愕した。

少年は、手術を受けるため、毎月検査を受けてきた。何年経っても、拒絶反応は消えなかった。

そして、三年前。とうとう、ウイルスに肝臓をやられ、ひどい炎症を起こしてしまったのだ。高熱が出て、意識を失い、病院へ搬送された。

死にはしなかったが、そのまま半年、入院することとなった。

ほとんど、寝たきりだった。ベッドに横たわったまま、空ばかり見ていた。個室は七階だった。昼過ぎになると、外から子供たちの声が聞こえてきたのを、今でも覚えている。

一年後、突然、ワイルドガーデンに対する拒絶反応は消えた。少年は病院近くにある施設で、小さなワイルドガーデンを渡された。

父も、母も、喜んでいた。

病気だった。その、病気が治った。二人は、そう言って笑っていた。

友達は、一人もいない。学校で、人に近寄ることができないのだ。少年は、周りの人間を汚いと思っていた。それは、ばい菌の類をうつされるかもしれない、という恐怖心だった。

部屋で、パソコンに向かって過ごす時間が多かった。インターネットを使い、世界各国を見

て回った。先進国から、発展途上国、北から、南、西から、東へ。

その間、ワイルドガーデンは少年の膝の上にあたり、肩まで登ってきたりと、とにかく少年に触れていた。頭の上に乗ってくることもあった。最初はわずらわしかったが、今ではそれが日常になっている。時々転がり落ちて、ぐう、と鳴いても、大丈夫かと一声かけるだけで、画面から目は離さない。

インターネットを通じて、人と交流したことは一度もない。ワイルドガーデンだけが、少年の話相手だった。

歴史、地理、自然科学。自分が今まで勉強したことを、よく語った。自分のことも、少しだけ話した。そんな時、ワイルドガーデンはさも理解しているという感じで、低く、ぐう、と鳴くのだった。

少年がワイルドガーデンの翼に気が付いたのは、ほんの数カ月前だった。急に太ったなと思い、抱いてみると、背中のを広げて見せたのだった。当然、少年は驚いた。だが、誰にも言わなかった。ワイルドガーデンには、絶対に自分以外の人間の前で翼を広げたりするな、と言った。見ただけでは、少し大きいワイルドガーデンという感じだった。ただ、その時の、ぐう、は少し頼りないものだった。実際、母が部屋を出ていく時などは、見つからないよう、扉に向かって見せつけるよう広げたりしている。

今のところ、父も母も気付いてはいない。

何か、いい匂いがする。焼けた小麦のにおいだ。まだ、体が重い。それでも、食欲はあるようだ。

「飯食ってくる」

少年は、パジャマのまま部屋を出ていった。

ワイルドガーデンは、翼を広げた。ベッドから、滑空した。餌や、水が置いてある、部屋のすみ。静かに、降りた。大きく口を開け、餌にかじり付く。

しばらく、何も食べていないようだ。

少年は、母が焼いてくれたパンケーキと、ヨーグルト、バナナを食べ、シャワーを浴びた。部屋の扉を開ける。ワイルドガーデンは、窓のところに座っていた。ガラス一枚隔てた外に、猫がいた。顔を近づけて、部屋の中を覗き込んでいる。

少年は、椅子に腰を下ろし、タオルで髪をふいた。不意に、黒いものが視界に入ってきた。

カラス。

猫が、高い声で鳴いた。腹のところをつかまれて、逃げようと、暴れている。だが、カラスの爪はしっかりと肉に食い込んでいて、離さない。

大きく、羽ばたいた。

「びっくりした」

悠然と、カラスは飛んでいく。ワイルドガーデンは、少し見上げながら、それを目で追っていた。

「野良なんだ。仕方ないだろ」

言いながらも、少年は同じように空を見ていた。

カラスは、猫を食べる生き物だ。昔は、カラスも猫も、同じくらいの大きさだったという。猫は、虫や、人間が出した生ごみを食べる。カラスは大型化し、反対に、猫は小さくなったのだった。

少年は、パソコンの電源を入れた。ワイルドガーデンが、机の上に飛んでくる。

頬杖をついて、画面をぼんやり見ている。パソコンの横から吹き出す風で、ワイルドガーデンの体毛が静かに揺れている。まだ、外が気になるらしい。

「お前、他人の心配してる場合じゃないだろ」

言いながら、自分もだ、と思った。

自分が、手術を受ければ、ワイルドガーデンは死んでしまうのだ。

風邪。症状は、倦怠感、発熱、関節の痛み、嘔吐、目眩。発疹、頭痛、下痢、肌のかゆみ。二日で治るものから、死に至るものまで。それ以外にも、症状は、幅広い。万能血球で対処できるものは、全て風邪なのだ。

人類が、ワイルドガーデンの細胞移植を開始したのは、もう、七十年以上も前の話。今でも、治すことのできない病は、数多く存在する。それでも、病にかかる人間は、極端に減った。そして、死ぬ人間も。

もし、人類がワイルドガーデンではなく、薬の類に頼ってきたとしたら、現在、とても生身の体で外へ出ることはできなかつたろう。シェルター内での生活、とまではいかないが、皆、防護服に身を包み、ヘルメットのようなものを付けて、街を歩いたはずだ。条例、いや、法律で、それを義務づけられているに違いない。

もう、人はワイルドガーデンなしでは生きていけない。だからこそ、少年は稀有な存在だった。病弱ではあるが、今まで、万能血球なしで生きてきたのだ。

手術予定日まで、あと三週間だった。

学校から家に帰ると、少年はまず、マスクを外す。顔を、すっぽりと覆うほどの大きさだ。それから、わずかに水を足したエタノールを手と腕に吹きかけて、よく揉む。持ち物にも、吹きかける。次に、茶色の液体でうがいをして、風呂場で全身を洗う。最初に使うのは、殺菌を目的とした石鹼だ。ほとんど泡が立たず、匂いは洗剤のものではなく、薬品に近い。それから、通常の石鹼で流す。

無菌状態などの特別な環境を作ったりはしない。ある程度汚れていなければ、体は弱っていくのだ。大したことのない攻撃にも、抵抗できなくなってしまう。

「ただいま」

いつものように、パソコンの電源を入れる。

すぐに、ワイルドガーデンが寄ってきた。口には、餌をくわえたままだ。飛んでも、あまり羽音はしない。机の上に、白い粉が落ちた。

「おい、こぼすなよ」

論文検索サイトを開く。一般の人間でも、無料で様々な分野の論文を閲覧できる。

万能血球がなくとも、自分は生きていけるのか。それを、それだけを、知りたかった。

ワイルドガーデンの万能血球に関する論文ばかり、読んできた。実験に関しては、詳細が省かれているためわからないが、書かれている内容なら、ほぼ、理解できるようになっていた。すべて、独学だった。初めは、専門用語が多すぎて、何を言っているのか全くわからなかった。言葉の意味を、一つ一つ調べて、ノートに書き写した。関連する内容も、地道に勉強した。パソコン一つあれば、事足りた。

最近、巷ではより低年齢での細胞移植手術が注目を集めている。まだ、可能性が示唆されているだけだが、期待は大きい。五歳以下の子供の死因の四割以上が風邪なのだ。

拒絶反応について。発表される論文は、結局、ワイルドガーデンと万能血球がどれほど優れているかを示すものばかりだった。ワイルドガーデンに拒絶反応を示す人間は、ほぼいない。その例外で、現在生存している人間。それが、自分だった。原因は、ある程度までわかっている。

白血球種の中の一つが、変異しているのだ。それが、所謂、アレルギー反応を引き起こす。攻撃対象には、ワイルドガーデンの万能血球も含まれている。

二十五年前の例と、同じものだった。そして、同じく、原因は不明。

それは、自分で調べてわかったことだった。当時から、既に予想はされていた。それが今もわかっていないだけだ。

未知の遺伝子が発現し、それが次世代まで保存される。予定された進化確率というやつだ。引き金となるのは、細菌類、ウィルスの突然変異だった。

現在、細菌類、ウィルスはあまりにも頻繁に変異を起こすため、番号で規格化され、名前は付けられていない。そして、その規格化も追い付いていない。

今まで、運だけで生きてきたように思う。毒性の強いものに感染したのは、あの、肝臓の炎症の時だけだ。

いつ、自分は死ぬのか。目に見えない恐怖をいつも感じながら生きてきた。光のない、漠然とした拡がりの中に自分がある。進んでいるのか、それとも、落下しているのか、わからない。そんな、感覚だ。

終わりは、もっと現実的だ。病気。つまり、彼らの言う、風邪。

入院していた頃、ベッドに備え付けられたテーブルの上に、小さなノートパソコンを置いていた。昔は、病院内では携帯電話すら使ってはいけない決まりだったらしいが、インターネットも使える環境だった。

生きる目的がない時代。そんな言葉を、目にした。自分には、関係のない言葉。自分とは、関係のない時代。そう、思った。

今も、そう、思う。目的なんてなくていい。僕は、まだ、生きていたい。あの時も、そう思ったはずだ。

覚えている。いつか、また同じように、死にかけるのだ。体が動かなくなり、小さな虫みたいなものの幻覚を見ながら、床を叩き、下の階にいる母に助けを求める。そんな日が、また来る。

「ぐう」

翼の辺りが、かゆいらしい。

ワイルドガーデンは、体をひねったり、足を上げたりしていた。届かず、ただ、その場で回っていた。

食べかけの餌に、足が当たり、机から転がり落ちた。床に当たり、砕ける。

ワイルドガーデンは、机の上から覗くようにしてそれを見た。少年の方を、ちらりと見る。

「怒ってないよ」

案外、こいつとは長い付き合いになった。

少年は、笑いながら、少しだけ泣いていた。

少年は、ワイルドガーデンを、どこかへ隠すつもりなのだ。

次の日、少年は学校が終わって、いつものように、一人で歩いていた。行きは父の車に乗せてもらうが、帰りは歩きだった。

「常識とは、あくまで彼らのルールでしかないのですよ」

すぐ後ろから、声がした。振り返る。少年は、見上げた。背の、高い男。本当に背が高い。黒髪。外国人だ。瞳も、黒い。

「そうだ、そうだ」

別の声。男の肩に、ずんぐりとした、ワイルドガーデンがいた。

瞳が、碧い。[了]